

## 2021年8月22日 聖霊降臨節第14 主日礼拝メッセージ

「見えないものに目を注ぐ」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 13章 24-43 節

まるで梅雨の季節に戻ったかのような、雨続きの日々ですが、皆様は如何お過ごしでしょうか。局地的で突然の大雨があちこちで何度も起きていますし、台風もまた発生しています。各地で土砂災害や洪水が起き、今も九州や中国地方などで被害が出ているそうですし、これからも注意が必要だと言われています。早速、被災地を助けるためにボランティアに行かれた方々もおられるそうですが、折からの新型コロナ感染症のために、これまでのようには移動も活動もしにくい、という大きな制約があります。

コロナの感染はオリンピック開催以降、拡大を続けていて、毎日のように感染者数は「過去最高」を更新し続けています。東京では1日5000人を超え、大阪では2500人を越えています。身近な所でも、検査で陽性反応が出て、感染したという話が沢山耳に入るようになってきました。感染した人の多くは、「何か特別に危険なこと、感染予防を怠って、無謀なことをしたから感染した」というのではなく、昨年から1年以上にわたって、予防に予防、自粛に自粛を重ねて来た末に、それでも感染してしまったのだと思われます。いつ誰が、どこで感染してもおかしくない状況が続いていますので、私たち一人一人が自分を守り、他人を守るために出来ることを、考えていきたいと思えます。

昨年から「ウイルス」という言葉を耳にしない日はない位に、「コロナウイルス」は有名になりましたが、そもそもウイルスというものは目には見えません。その大きさは0.1マイクロメートルだそうですから、太陽のコロナのような形で写っている写真は電子顕微鏡写真です。それ位に小さな小さなウイルスによって、世界中に感染が拡大し、これまでに2億1100万人以上が感染し、442万人が亡くなっているということに驚かされます(wikipedia)。

人類の歴史の中では、しばしば疫病が蔓延し、多くの人々が亡くなって来ました。コロナのパンデミック(世界的大流行)で有名になったのが、約100年前の「ス

ペイン風邪」と呼ばれるインフルエンザです。しかし、その当時はまだウイルスの存在は分かっていませんでした。「細菌」ですら、その存在が分かってから、まだ150年ほどしか経っていません。それ以前には、それこそ手の「消毒」すら、当たり前ではありませんでした。お産の現場に立ち会う産科医が、死亡率を下げるためにどうしたらいいかを試行錯誤している中で、お産の前に手を塩素消毒すると、死亡率が劇的に改善されるということが発見されました。しかし、当時の医学界の中ではその学説は異端視されて受け入れられず、塩素消毒を発見し提唱した医師は、神経衰弱の末に若くして亡くなってしまったそうです(センメルヴェイス・イグナーツ：1818～1865)。奇しくも、その数年後に「細菌」が発見され、公認されるようになり、その「消毒」の理論も広く認められるようになったのだとのこと。

目の前に証拠を出されて、目に見えるものを認めるのは簡単ですが、目に見えないものを認めるのは難しいのだと思います。さらにはその時々政治の力学や、お金の動きによって、見えているものすら見えなくされたり、見えていないものを見えていると言われたりするの、残念ながら世の常です。福島第一原発の放射能汚染による健康被害がこれだけ報告されていても、未だに「因果関係は認められない」と言われ続けていますし、現在のコロナの感染急拡大についても、「オリンピックとは直接の関係はない」と言われ、明後日からはパラリンピックが引き続き開催されるようです。人々の命を守るため、選手たちを守るため、今からでも中止にして頂きたいと願っています。

「見えるもの」と「見えないもの」……。恐らく人類の初めから続く、それらのものについて、今からおよそ2000年前の聖書は、何と言っているのでしょうか。今回の聖書のお話は、イエス様がガリラヤの貧しい農民たち、小作農や日雇い労働者たちに語った数々の「たとえ話」の内の3つのたとえ話でした。聖書協会共同訳には、それぞれ「毒麦のたとえ」(24-30)、「からし種とパン種のたとえ」(31-33)という小見出しがつけられていて、34節以降は、直接のたとえ話ではなく、その解説となっています。今回は読んでいませんが、この直前にあるのが、岩波書店のマーク、画家ミレーの絵でも有名な「種蒔きのたとえ」(3-10)です。ですから、「種蒔き」「麦」「からし種」「パン種(酵母)」など、これらのたとえ話の聴き手であった農民たちにとっては、とても馴染み深い、よく分かる話だったのでしょう。イエス様はあちこちで、多くの群衆たちにこのようなたとえ話をされたと思いますが、それらの

イエス様のお話の記憶を、この「マタイによる福音書」の執筆・編集者たちがこのように並べて配置しました。現代、私たちがこれらの一連のお話を読むと、ついつい36節以降の解説「毒麦のたとえの説明」を読んで、悪魔と天使ですとか、世の終わりに火で焼かれるとか、そのような言葉に驚いてしまいますが、それらは実際にイエス様が群衆たちに語ったことではなく、イエス様から半世紀程を経た、後の時代の編集者たちが、当時の彼らの解釈・理解に基づいて書いたものだと考えられます。ここでは、むしろガリラヤの貧しい農民たちが、イエス様のたとえ話をどのように聞き、受け止めたのか、を考えてみたいと思います。

日本語訳では文語訳の時から「毒麦」と訳されているので、如何にも悪いものという印象がありますが、この言葉は聖書のこのたとえ話にしか登場しない言葉ですので、実際のところは何の植物かは分かっていません。ですので、麦畑の中に、いつの間にか紛れて生えている「雑草」のことだろうと考えられています。田んぼでお米を作っている私たちの感覚からすると、ヒエでしょうか。田植えの時に、自分たちで植えたわけではないのに、どこからともなく紛れ込んで、なかなか見分けがつかない。それが大きく育って、刈り入れの季節になると、イネよりも頭一つ分くらい大きく育っていて、穂先の形も違うので、明確に分かるというものです。ここで「毒麦」と言われているものも恐らくそのようなものではないでしょうか。ヒエがはびこるとイネの収量が減ってしまいますので、「毒麦」も農民たちにとっては「誰の仕業か」「敵の仕業だ」と言いたくなる位に、深刻な問題でした。しかし、ある程度大きく育つまでは、見分けがつきにくく、麦まで一緒に抜いてしまうかもしれないので、刈り入れの時に先に毒麦だけ集める、というのが古くからの知恵だったのだと思います。そのように考えると、このたとえ話が伝えていることは「毒麦を抜き集めて焼いてしまうこと」ではなく、むしろ敵か味方かを早まって判断することがないように、「刈り入れの時まで一緒に育つままにさせておくこと」を伝えているのだと理解することができます。

続く「からし種」のたとえ話ですが、私たちが食べているゴマ粒よりも、もっともっと小さい粒なのだそうです。ですが、人々にとっては麦と同じように重要な食物だったそうで、からしの葉を煮て食べたり、生のままサラダとしても食べられたりするそうです。そしてそれが成長すると大きいものでは3メートルの高さにもなり、鳥が巣を作ることもあるということも、人々は畑作業の経験から知っていました。33節の

「パン種」のたとえ話では、「3 サトンの小麦粉」とありますが、これは約 40 リットル、34 キログラムですから、ものすごい分量です。今日もこの礼拝の後に、釜ヶ崎にお届けするおにぎりを作るために、今ここに炊飯器を並べて 5 升のお米を炊いています。約 8 キロ、50 合のお米で 130 個ほどのおにぎりを作っていますが、34 キロの小麦粉というと、どれほどでしょうか。食パンにすると、120 斤以上ですから、恐らく女性が一人でパン作りをしたのではなく、それこそ地域のお祭りのような共同体全体での食事作りの際に、女性たちがパン作りをしていて、そこに一人の人がパン種、生酵母を入れた。それによってやがて全体が膨らんだ、ということでしょう。さて、これら一連の話は、聞く人々の心の中に何を思い起こさせたでしょうか。それは目には見えなかり、小さかったりするけれども、確かにそこに存在しているもの。やがて芽を出し成長し大きくなっていくもの、全体に作用し膨らませるもの。神の国には、そういうものがある。神様の力はそのような形で、いつの間にか、どこからか、私たちの間に確かに働いている。私たちの日々の働きの一つ一つも、取るに足りない、力の足りない小さなものだけれども、それも神様によって豊かに用いられていく……。そのような期待、希望を与えたのではなかったでしょうか。

「コリントの信徒への手紙Ⅱ」4 章 18 節には「私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです」という言葉があります。私たちは普段、「見えるもの」、モノやお金、数値で測れるものに囲まれて暮らしていますから、それらが増えたり減ったりすることに、一喜一憂したりしています。しかし、本当に大切なこと、本当に価値のあるものは、そこにはではなく、見えないものの中に、見えないものとして存在しているのではないのでしょうか。

今、コロナの感染者の数の増減や、経済状況の浮き沈みに一喜一憂したりしている私たちですが、それらの中で、本当に大切なもの、見えないけれども確かなものは、どこにあるのでしょうか。また医療崩壊と「自宅療養」という医療放棄政策の下、見えなくされている方々は、どこにおられるのでしょうか。目には見えないけれども確かに存在し、そして私たちと共にあり、私たちの間に働いて下さる神様に信頼して、これからの日々も私たちはこの命を豊かに用いられていきます。